

あとがき

データを突きつけられて、改めて驚いたことがある。京都市山科区社会福祉協議会が10年ぶりに実施した単身高齢者の生活実態調査の結果だ。介護サービスを利用しながらひとりで暮らす高齢者が2割を占めていた。75歳以上に限って言えば3割を超える。山科区に限らず、介護項目を扱った直近の国民生活基礎調査(2007年版)でも、要介護認定者の24%が単独世帯の高齢者となっている。65歳以上の高齢者が暮らす家族形態では、単独世帯が夫婦世帯に次いで多く、三世同居や独身の子どもと暮らす高齢者の家族を凌いでいる。65歳以上の高齢者の6割が、夫婦世帯、単独世帯となっている。子どもや孫と暮らす高齢者は2割を切るほどに激減し、家族形態でいえばもう少数派である。いまや高齢者家族の主流は、夫婦ふたり暮らしとその後に続くであろう単独世帯という「小さな家族」である。

安定した大家族を前提とした今日の社会の制度設計は、どのような変容課題を抱えているのか。主流となった「小さな家族」で暮らす高齢者の圧倒的多数が、健康にも経済的にも、家族・友人・知人にも恵まれ安心安全な生活を送ることが出来ているのであればなんら不安視する必要もない。むしろ自律的な個人化社会の到来として歓迎されるべきことである。一昔前に流布された「豊かな高齢者」像はこのようなものであった。しかし、現実を見ればどうもそのような高齢者ばかりでなく、むしろ健康でもなく経済的な不安も抱え地域でひっそりと孤立した生活を余儀なくされている高齢者のほうが多数を占めるのではないかという茫漠とした不安が頭を擡げてくる。冒頭の山科区調査や国民生活基礎調査に現れた要介護状態になってもなおひとりで暮らしている高齢者が単独高齢者世帯全体の4分の1を占めるということなどは、そのおぼろげな不安を確信させるようなシンボリックな実態である。

介護サービスを利用しながらひとりで暮らしている高齢者の生活はどのようなものであろうか。その暮らしを支えているものはなんだろうか。利用している介護のフォーマルサービスやインフォーマルサービスはどのようなものがあり、どのように高齢者の生活支援に機能しているのだろうか。あるい

は必要はあるにもかかわらず不足しているものは無いのだろうか。不安におびえることは無いのだろうか。その生活は苦難と絶望、孤立の堆積だけで、希望や連帯に繋がる暮らしの光明はまったく無いのだろうか。あるとすれば暮らしの潤いとなって場面化しているのはどのようなことであろうか。

私たちは、以上のような問題関心を確認しながら、実際に介護サービスを利用しながらひとりで暮らしている高齢者へのインタビュー調査を準備した。調査は2007年9月一杯かけて行われたが、そのインタビュー内容の詳細を収めたのが本書である。16人によって語られたひとりで暮らす要介護高齢者の生活と介護の実際だ。老化に伴う心身機能の低下やそれに対応する介護サービスなどの社会資源、あるいは社会構造から派生する年金や就労などの経済的課題というハードな課題に加えて、気遣いや見守り、社交など家族・近隣・友人・知人など豊かな人間関係に包み込まれて暮らすというソフト課題も析出された。ひとりで暮らすその後に「みんなと一緒に暮らす」という施設で暮らすニーズも正当に評価されていた。利用者同士の交流が広がる社交場としてのデイサービスセンター機能のようにハードの中にも運用次第でソフトに転化する機能もあった。ハード課題は確かに明日の言い知れぬ大きな不安材料だが、今日を生き抜く確かなエネルギー源になるのはむしろソフトの力ではないか、という思いも強くした。今日を生き抜く力の水脈は、ハード課題に辿り着く確かな水路である。16人によって語られた生活と介護の実際は、地域当事者によって語られた地域福祉／社会福祉協議会の課題と可能性である。

本書の素材となった調査は京都市山科区社会福祉協議会の格段のご支援で可能となった。また、時間を割いて快くご協力頂いたひとり暮らしの皆様のご協力が無ければこのインタビュー調査は実現できなかった。そして、就職活動や卒業準備で忙しい4回生の後期にこうした調査に積極的に参加し、インタビューや録音データの活字化、分析作業などを担った学部生・院生諸君にも感謝する。君たちの傾聴と対話のインタビューこそ本報告書の力である。

2009年11月1日

津止 正敏